

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

出会い

皆川洋輔

「教員」になりたかった。

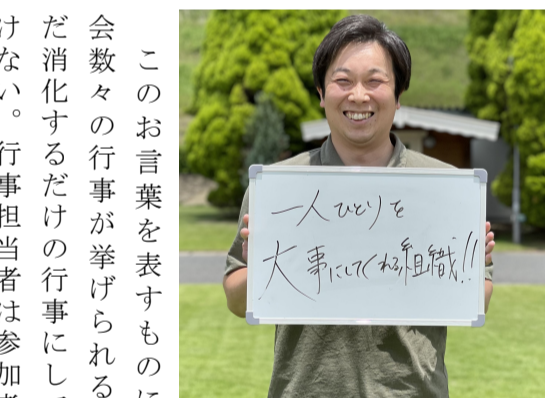
今ではなりたい職業ランキングから遠く離れてしまっているが、小学校、中学校共に良い教員に恵まれ、厳しく指導されてもどこか良い所を見つけ短所を削る、そんな「人」の人生に影響を与える崇高な職業に憧れがあった。高校に行くと人の力になれる人間になりたいと考えるようになり、卒業後は福祉系大学に通った。在学中に療育等の現場経験を経て障害児教育に興味を持った。しかし、一ヶ月間の養護学校の教育実習に行き、自分の思い描いた理想は現実と異なり、「教員」への道は進まない

と決めた。その後は就職活動時期になり、福祉施設、一般企業を受験し内定を頂く中で「佑啓会」に出会った。最初に対応してくださったのは長良課長(現…部長)。合同説明会にて沢山の学生と向き合っていたはずなのに、笑顔で親身に話を聞き質問に答えている温かい印象は今でも忘れない。その後、事業所見学をさせてもらうこととなり、はじめて「ふる里学舎」を見学した。広大な敷地にデザインに磨きがかかった建物に驚いた。



高尾山旅行を楽しむ二人

20年前の「ふる里学舎」は「昭和」そのものの職場だった。職員の上下関係は厳しく、新人とあれば下手な言動はとれず、何か業務を行うにしても先輩の目の前ではなく、物陰に隠れて同期と確認し合う時代だった。そんな萎縮しきつていた状況の私を見てか、1つ年代が上の並木さん(現…ふる里学舎蔵波係長)が声をかけてくれた。「家で秋刀魚焼くからおいでよ」と誘ってもらい、お酒が飲めない自分でもプライベート、仕事共に行動させてもらうこととなった。佑啓会バレーボール部の勧誘も並木さん。「部活に入れば先輩との交流も早いよ」と、部員集めが難航しているからなのか、やったことがなくてもとりあえず入部。6年近く活動に参加し多くの先輩方と親密にさせて頂くこととなった。並木さんとはその後も仕事を進めるに当たって常に信頼を置き、仕事の表舞台に立つのは並木さん、裏方で細かい仕事をするのは皆川といった調子で、周りからも「並木と皆川は良いペアだな」と言われた。仕事の楽しみ方を知るきっかけとなったのは並木さんのおかげである。今では違う部署だが、今後もなにかあれば阿吽の呼吸で一緒に仕事していきたいパートナーである。



あなたにとって佑啓会とは？

時には辛い失敗も多くあった。木工作業を担当していた際には、外部注文品の作成が納期までに間に合わず、作業場で夜を過ごしたことが幾度とあった。そんな時も並木さんを始め、多くの先輩が一緒に残って作業を手伝ってくれたことは忘れない。

佑啓会では、里見理事長の「人」への思いがとて強い。理事長のお言葉は数多く存在するが、その中でも特に私が入っているのは「自分と一緒に過ごしてくれる人を大切にすることである。」「周りにいる人を大切にしていれば、必ず相手も大切にしてくれる。」「この言葉は職場人生の中で一番の刺激となり、今でも大切にしている。周りというのは、利用者はもちろん、職員同士、利用者家族であるが、私生活にも多く影響を受けている。どうしても生活をしたい自分本位になりがちになる。相手の事を考えながら生活をするこの大切さ、今はだれを中心に動くべきなのか、どこにニーズがあるのか、または周りで困っていることはないか考えて行動すること、福祉的な観点だけでなく社会で生きていく上で大切なことを教わったと思う。

10年前から法人の研修委員を担当している。新人職員をはじめベテラン職員、専門員(パート)を含む職員全体の研修体制を構築する役割として、ここでも多くの職員と「出会う」。一人、また一人と新しい仲間が増え、法人内で生き生きと前向きに仕事をしたい姿を見ることに嬉しさを感じている。そして佑啓会といえ「接遇」である。「明るく、元気に、さわやかに、そして品良く」をモットーに職員の育成を研修委員が一つの礼儀として責任を持つて伝えている。法人内この事業所でも、来客者がいけば立ち止まって気持ちの良い挨拶をする。職員間でも「お疲れ様です！」と職員同士のコミュニケーションの一つとして、また相手を気遣うこと



研修の講師を務める皆川係長

んでもらえる企画をするように」と、日々お話をされている。もし、「自分が参加者の立場であれば」「子供が参加者となれば子供目線に」と担当者同士が相手のことを第一に趣向を凝らして行事を企画する。地域の方を招待して行われる納涼祭が良い例である。

里見理事長に出会ってなければ、このような言葉を知る機会はない。体感することもなかっただろう。

を目的に挨拶を徹底している。その他、福祉系大学ではない職員、中途で入られた職員で障害福祉に初めて関わる方も多いため、どうすれば効果的な研修になるか、それこそ「研修受講者の立場になつて」案を練ることが重要であると感じている。様々な対象者を見て研修翌日から即効果が見られること、また職員個人の人生に影響を与えられるような研修を企画していきたいと思っている。

20年を振り返ると、今では「教員」の道ではなく障害福祉の道に進んで良かつたと感じている。障害福祉は「人」の人生に直接触れる仕事であり、なくてはならない「エッセンシャルワーカー」。この仕事にプライドを持ち、全力で障害を持つ利用者の為に向き合っていきたい。

そして、法人にはチームワークがあり、同じ方向を見て前向きに仕事ができる仲間がいる。困難な時も支えてくれる職場がある。これからは大切にして作り上げていくのは私達職員だ。

私が里見理事長、長良部長、松橋施設長、並木さんと出会い、この道に進むきっかけを見つけたのもう一つのことと同様に、後輩にも様々な「出会い」から生まれる感動の機会とすばらしさを共有していきたい。そして集まった職員の力がベストな障害福祉を実践し、前を向いて利用者の力になれるよう、微力ではあるが毎日努めていきたいと思う。

(ふる里学舎工芸館 施設長)

感謝報恩

大野 剛生

私と佑啓会さんとの最初の出会いは、健康経営の推進についてからでした。2017年に経済産業省は、特に優良な健康経営に取り組んでいる企業(団体)を見える化し、社会的に評価を受けることができる環境を整備するために「健康経営優良法人」認定制度を創設しました。創設された当時は、まだまだ健康経営というものが社会では認知されておりませんでしたので、弊社の取引先等に健康経営の重要性を説明し、取り組みを申し出ても、ほとんどの社長はピンと来ておらず、健康経営を推進しようという企業(団体)はほとんどありませんでした。そんな時代の中で、佑啓会さんは健康経営優良法人の認定制度創設前から健康経営に繋がる取り組みをされておられ、感銘を受けました。この時から縁あって健康経営の推進に向け、一緒に勉強をさせていただいております。里見常務を中心とする健康経営推進室は若い職員の方を中心に組織されており、事業所を横断したチームとすることで、この健康経営推進室のチームワークは素晴らしく、年々高度化する健康経営優良法人の認定要件を常に先取りしておられます。2024年度認定では社会福祉法人として全国で唯一のホワイト500認定法人となる快挙を成し遂げられました。国内有数の大企業でも認定取得が難しいホワイト500を2021年度より4年連続で選出されている取り組みは本当に素晴らしく、日本トップクラスの組織である何よりの証拠です。

※健康経営優良法人・大規模法人部門の認定法人の中で、特に優秀な全国で上位500社に対して、「ホワイト500」の冠が付加されます。

この健康経営の取り組みのペースにもなっておられると思います。佑啓会さんとお付き合いが始まっ

て、最初に驚いたのが、どの事業所を訪問しても、いつも職員の皆様が笑顔で、本当に気持ちの良い挨拶を交わしていただけていることです。職業柄、様々な企業や団体に訪問する機会がありますが、佑啓会さんのように、どの事業所に、いつ訪問しても、いつも素敵な笑顔で挨拶を交わせる組織に出会ったことはありません。里見理事長のお考えが深く浸透しているからだと思いますが、佑啓会さんを見習っていかねばならないと感じる瞬間です。



2024
健康経営優良法人
Health and productivity
ホワイト500

弊社は専門の保険代理店として私の両親の時代から合算しますと50年超、市原市で保険代理店を営んでおります。親子3代にわたり、長くお付き合いいただいているお客様も少なくありません。目先の利益を追いかけたいのではなく、お客様から厚い信頼をいただけて、30年、50年と長くお付き合いいただき、ともに歩む、そういう関係を築けるように努めております。そんな想いの中で、市原市にお世話になっている恩返しではありませんが、地域への貢献をしようと、一番身近なボランティアである小学校のPTA活動に4年前から携わるようになりました。3年前からは市原市立国分寺台西小学校PTA(西小PTA)の会長職を仰せつかり、今も会長として活動が続けています。西小PTAでは、コロナ禍前は西小フェスタというお祭りを企画し実施していました。バザーやお化け屋敷、飲食の出店。ゲームコーナーなど、盛りだくさんの内容で、PTAだけでなく地域のボランティア団体や各種クラブチーム

の協力をいただきながら実施する大規模なイベントでした。しかしコロナ禍で中断せざるを得ず、西小フェスタをやつと再開できる時には、コロナ前の西小フェスタを知っている役員がほとんどいない状態となっておりまして。過去と同じような催しを企画することは、感染予防などの子供たちの安全確保から難しく、新しい西小フェスタの形を模索することから始まりました。



西小フェスタの様子

そのような状態の中、子供たちに障害福祉がもっと身近になってもらえようと、佑啓会さんに西小フェスタに出店をお願いしたところ、快くお受けいただきました。障害者福祉活動の掲示とパンの販売をしていただいておりますが、パン販売は子供たちから人気が高く、あつという間に売り切れてしまうほどで西小フェスタの中でも特に人気のお店になっております。今年も西小フェスタを開催いたします。今年、今春にふる里学舎の木工科に制作していただいたストラックアウトで子供たちと一緒に遊んでもらう計画をしています。新しいストラックアウトで遊ぶことを楽しみにしている子どもたちに代わりまして、今年も快く西小フェスタへの出店を承諾していただき、厚くお礼申し上げます。

(株式会社オンフェイス 代表取締役)

次世代へ繋ぐ学びの輪

金子 なあな

皆さん突然ではありますが「企業内大学」という言葉を聞いたことはありますか？

職員が自己啓発を行い、専門知識やスキルを磨く機会を提供している場です。佑啓会ではタスクカレッジがその役目を担っています。「今すぐ必要というわけではないが、長期的にみればとても重要なこと」をテーマに職員自らが講師を務め、時には外部講師の方をお招きしています。そんな私も僭越ながら6月に仕事上の伝えるスキルについての講義をさせて頂きました。まさか3年目で幹部の方や先輩方に向けて講義をするだなんて思ってもいなかったので本番はとても緊張しました。結果として、自分の仕事の仕方を改めて見つめなおす機会にもなり、有意義な時間を過ごすことができました。

このように若手職員をどんどん前に出してくれる佑啓会ですが、今年に入ってまた新たな取り組みが始まっています。それが「佑thCollege」です。皆さんから読み方が分からないとよく言われてしまうのですが、ユースカレッジと読みます。当初我々3年目職員7名から始まった佑thカレッジですが、タスクカレッジとは違い、若手職員が中心となって自ら学びの機会を作っていく組織となっています。活動内容は全く形式的なものではなく、自分たちの興味のあることについて自由に学ばせてもらっていて、里見常務や幹部の方からご講義をいただくこともあります。また、タイピングスキルやディベート等で競い合い、お互いに切磋琢磨しています。ちなみに佑thカレッジという名前もディベートで決まりました。なんと里見常務が相手となり、メンバーは絶望していました。健闘し、まさかの勝利。佑thカレッジという名前を取

り、thにはこの学びの輪が次の代へ引き継がれるようにという意味が込められています。最近では新たに2年目のメンバーも加わり、8月5日には「Tasuku College 2024」を開催し、2024(令和6年)から見た障害福祉」という障害福祉イベントを企画・実施させていただきました。



当日司会を務める金子支援員

社会福祉法人フラットの立松さんという元々大手コンサルティング会社に勤めていたゲストの方から講義をいただく新しい形のイベントでした。学生さんからは他分野から見た福祉分野が新鮮だという声が上がりました。大好評でした。イベント準備は大勢の前で話す経験のない後輩達が一生涯懸命に準備している姿が微笑ましく、こんな風に次の代に引き継がれていくのかとしみじみ感じてしまいました。



学生に向けて講義を行う立松氏

福祉業界で働いていると、時々なんだか他業界から隔絶されている感じがしてしまう時があるかもしれません。ただ、福祉は人々の生活の根幹

にあり、実は世間が思うよりも身近にあるものだと思ふようになりました。障害福祉はなかなか世間からは見えづらく、そこそこのところにあるのかもしれませんが、そこで一生懸命に支えている人がいます。だからこそ自ら学ぶ姿勢を忘れないで、尚且つ佑啓会から他分野を積極的に巻き込み、障害福祉の魅力をより多くの方に知っていただく。そんな想いを心に留めてこれからの福祉業界を少しでも盛り上げていくお手伝いが皆さんと出来ればと思います。

(ふる里学舎 支援員)

佑Tube



障害福祉で働く職員のリアルを発信！
2週間に1度動画を公開中。
是非、ご覧ください。

編集後記

今年の甲子園では暑さ対策の為に、午前と夕方に分けて行われた「2部制」、昨年からは5回終了時に10分間の休憩を行う「クーリングタイム」が導入されました。例年と大会の様式が変わる中でも、全力で戦う球児達の姿に変わらぬ感動がありました。今後は「2部制」、「クーリングタイム」が当たり前になっていくのだと思います。

佑啓会の夏も、暑さに負けじと行事が盛りだくさんで、利用者はじめ職員、家族と、多くの笑顔が生まれました。今までの当たり前を当たり前に行う。そんな想いと共に佑啓二九号をお届けします。

(支援員 栗川克明)